

わがはい 吾輩は猫である。

わがはい
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろう。この時妙なものだと思っただけの感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟が一足も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違って無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたらよからうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這って行くとなんかの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云ったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問す

る時の通路になっている。さて邸^{やしき}へは忍び込んだもののこれから先どうして善^いいか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るという始末でもう一刻の猶^{ゆうよ}予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方^{かた}へ方^{かた}へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入^{はいりこ}っておったのだ。ここで吾輩は彼^かの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇^{そうぐう}したのである。第一に逢^あったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否^{いな}やいきなり頸筋^{くびすじ}をつかんで表^へへ抛^なり出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任^{まか}せていた。しかしひもじいのと寒いにはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙^{すき}を見て台所^はへ這^{はい}り上^あった。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這^{はい}り上^あり、這^{はい}り上^あっては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの三馬^{さんま}を徹^あんでこの返報をしてやってから、やっと胸の痞^{つかえ}が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方^{かた}へ向けてこの宿^{やど}なしの小猫^{こねこ}がいくら出しても出しても御台所^{おだいどころ}へ上^あって来て困りますという。主人は鼻の下^{はな}の黒い毛^{ひげ}を撚^{ひね}りながら吾輩の顔をしばらく眺^{なが}めておったが、やがてそんなら内^{うち}へ置いてやれといったまま奥^{おく}へ這^{はい}り入^いってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜^{くや}しそうに吾輩を台所^はへ抛^なり出した。かくして吾輩はついにこの家^{うち}を自分の住家^{すみか}と極^きめる事にしたのである。

451 Unavailable for Legal Reasons

概要

「法的理由により取得不可」を示すHTTPステータスコード。

国家による検閲が行われたコンテンツ、著作権やプライバシーの侵害、不敬罪、安全保障上脅威となりうる内容、その他違法な内容等にアクセスした際に返される。

由来

「451」という数はレイ・ブラッドベリのディストピア小説『華氏451度』に由来する。

『華氏451度』は、本の所持が違法化された世界で、隠匿されていた本を焼却処分する「昇火士(ファイアマン)」のガイ・モンターグの運命が奇妙な少女や本に執着する老婆らとの出会いを通じて大きく変わる様を描いているSF作品である。

考察

国家による検閲が行われたコンテンツへのアクセスに対しては、検閲を受けたという事実そのものが検閲されることにより、451ではなく単にアクセスが禁止されていることを示す「403 Forbidden」や、その存在を隠す意図をもって「404 Not Found」のコードが返されるということが大いに考えられる。

この「451 Unavailable for Legal Reasons」のコードの存在からは、国家権力によるインターネットの検閲を絶対に許さないという、本来の意味での「ハッカー」たちの強い想いを感じとることができるであろう。

参考文献

- MDN Web Docs 「451 Unavailable For Legal Reasons - HTTP | MDN」
<https://developer.mozilla.org/ja/docs/Web/HTTP/Status/451> (2022/08/09閲覧)
- ウィキペディアの執筆者たち「HTTP 451」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』(2022/08/09閲覧)

- レイ・ブラッドベリ『華氏451度 新訳版』(早川書房,2014)